

キス・イン・ザ・ダーク	2
大人の夜は子どもの時間	12
愛され方の学び方	16
人体改造博物館	20

キス・イン・ザ・ダーク

「お！ そうかそうか、こっちは大丈夫だから気にすんな！」  
「でも……」

「大丈夫だって。心配すんな、な？」  
職場に着くと、院長と同僚の山岸が何やら話し合っていた。こちらに気付いていなかったらまずいので、わざと白杖で音を立てる。

「——あ、北川くんおはよう」

「おはようございます。あの、何かありましたか？」

訊かない方がいいかなと思っただけで、人に聞かれてまずいような話は職場ではしないだろう。それに、二人はもう輝が出勤する時間だとわかっていたはずだ。

「うん、あのね」

「いや、院長——」

「いい？ うちはさ、みんなで助け合って職場なの。でね、」

山岸の言葉を遮り、院長が言った。それから輝に向き直る——心配がした。声の向きが変わったような気がしたのだ。

「山岸くんの奥さんさ、妊娠してるでしょ」

それは聞いていたので知っている。妊婦検診や両親学級の際に休んでいたし、つわりのときには院長がゼリー飲料や山岸自身の食事を持たせたりもしていたのだ。「それでね、予定はまだ先なんだけど、切迫早産で入院になっちゃったんだって。でも二人のご両親はほら、出産後に来てもらうって話になって、お仕事もされるみたいだから。だから山岸くんに休めって言ってるの」

「……え？」

休めって言ってる……？ 山岸からの休ませてほしい、に対する院長の返事が……という話ではないのか。

「でも山岸くん、みんなに迷惑かけるからやだってわがまま言ってるさ」

「院長……お気持ちはありませんが、入院が長引きそうなんです。もしかしたら出産まで退院できないかもしれません」

「うん、でもさ、奥さんにとっても子どもにとっても旦那であり父親であるのは山岸くんだけでしょ。別にさ、毎日休めって言ってるわけじゃないんだよ。人が足りないときはちよつと無理しても入ってもらうかもしれないけど、せめて少し落ち着くまでは奥さんのことを優先してさ。まあ、休みまではいなくても出勤の間をずらすとかさ。とにかく切迫早産なんてベッドから降りることもできないんだから身の回りのこととかさ、全部やってあげなきゃ」

「そうですけど……」

「どうやら気を遣いあっている故の話し合いだったらしい。心の中でほっと息を吐き、タイミングを見計らって口を開く。

「あの」

「ん？」

「僕、なるべく入りますよ」

「え……いや、でも北川くんは——」

「入れる？ いける？」

「はい。困ったときはお互い様ですから。僕のとさだつて体調崩したときとか、ひつたくりに遭ったときとか、代わってくれたじゃないですか」

「体調不良のときは元気になるまで、ひつたくりに遭ったときは心が落ち着くまで、みんなが休んでいいんだよと言ってくれた。院長は今の山岸にするみたいに輝にも気を遣ってくれて、ひつたくりのときは怖いだろうと言っただけの間、送迎までしてくれた。」

「ありがとう！ じゃあ極力送り迎えするからさ、そうしたら少しは体も楽だね？」

「山岸の前なので、院長の申し出に頷いておく。院長も突然のことで大変だろうか、あとで断っておけばいい。」

「助かります」

「よし、決まり！ とにかくさ、一番不安なのは奥さんだから、奥さんのことを一番に考えて動こう。介護……なんだっけ、何か雇用保険のとかあったよね？ 俺もちよつと調べておくし」

「すみません……ありがとうございます！」

「山岸の礼をもって話はまとまった。少しほっとしているようにも聞こえたから、本当は休みたかったのだろう。輝の負担は増えるけれど……事情を話せば三崎も理解してくれるだろう。家事は少し疎かになるかもしれないけれど、ずっと続くわけではない。」

「それに——もうすぐ三崎の誕生日。せつかなら少しいいものをプレゼントしたい。自分で選ぶというのがなかなか難しいので贈り物をするのは苦手だけれど、お

店の人にも協力してもらって、今年は何か残るものを渡したいと考えていた。  
(よし、頑張ろう！)

「ただいま——輝？」

「あ……」

いつの間にか眠ってしまったらしい。ここはどこだっけ——手を動かすと、その感触からソファだとわかった。そうだ、リビングだ。

「危ないぞ」

「ン……」

起き上がろうとすると、すぐ近くに三崎の気配を感じた。顔を向けると、肩を抱くようにして起こされる。

「すみません」

「疲れが溜まってるな。大丈夫か」

「はい……」

山岸の休みが増え、輝の仕事は週に五日になった。たった一日増えただけ。それでも休みが火木日から木日だけになると、精神的な疲れを感じていた。

「明日も仕事か」

「はい……」

明日行けば、明後日は休みだ。三崎のように朝早くから夜遅くまで働いているわけではないし、残業もない。甘えていると思うけれど、疲労感自分ではなかなかどうにもできなかった。

「もう家事はしなくていい。食事は隣の若衆に作って持ってきてさせる。掃除は俺が適当にするし、輝は家では体を休めなさい」

「隆司さん……」

気を遣ってくれているのはわかる。けれど三崎にも若衆と言われる人にも迷惑はかけたくなかった。

(引き受けるって言ったのは自分だし……)

それに、山岸は会う度とても恐縮している。奥さんにも気を遣って大変だろうに。だから疲れが顔に出ないように意識している——それもあって、余計に疲れているのかもしれない。

「輝。飯は食べたか？ 今日はまだもうベッドへ——」  
「あ、いえ……お風呂もまだだし……」

「じゃあ入れてあげよう。湯を張るよ」

「いえ、大丈夫です」

三崎だって疲れているのだ。ソファから降り、キッチンに立つ。

「今ご飯温め——」

「ら——」

背後に来ていたことは気付いていた。腕の中にすっぽり収められたと思ったら、顎で頭頂部をぐりぐりされた。

「いたっ！ やだ、いたいっ」

「お仕置きだ」

本気で力を入れられていたわけではない。ただのじゃれあい。それでもお仕置きと言われるとドキリとする。

大人の夜は子どもの時間

金曜日。

「今度、浩太の誕生日なんです」

浩太が塚田の寝かしつけによってぐっすりと眠ったあとの、夜の時間。牛乳たっぷりのコーヒーを塚田に差し出す。慣れたのか、顔をしかめられることもなくなった。

「そうか。パーティーはするの？」

「来てくれますか？」

誕生日当日は平日なので次の週末にやるからと告げると、塚田は少し拗ねたような表情を作った。

「当然だろう。俺はもう自分の子どもの気分にいるのに」

俺の子だと言い切らないのは八元への気遣いだ。しかし本当は自分の子どもだと思ってくれていることを知っている。

「ありがとうございます」

「プレゼントは何がいいかな」

「何もいりませんよ。来てくださればそれだけで」

浩太はきつものを欲しがらるだろうが、塚田には普段からいるんなものをもっている。外に遊びに行くときにもほとんどお金を出してもらってしまっているし、これ以上出費させるのは申し訳ない。それにまだ小さいのだ。プレゼントは八元から渡すので、それでじゅうぶん。それに、おもちやが増えると部屋が悲惨ことになる。

(あ……ママから、はどうしようかな……)

「……どうした？」

「え？ あ……」

「そーいや浩太の母親は……来るの？」

言ってしまうのか悩んだ。言えばきつと気を遣うだろう。でももう隠しておく関係性ではない。

「……初めて会ったとき、ハンカチを拾ってくださったじゃないですか」

「ああ、あれが誕生日プレゼントだったな」

「いえ……や、まあそうなんですけど、あれは母親からってことで僕が渡したんです」

「……という？」

「元妻は、浩太の誕生日を忘れていたみたいなので。だから僕が買って、ママからだよって」

「そうだったのか……」

塚田が眉根にしわを寄せた。やはり気にさせてしまった。しかし知っておいてもらった方がいいことだと思っただ。これから何年も、浩太の誕生日と一緒に祝ってもらうには。

「だからパーティーに来ることはありません。今年もママからと言って何か渡すとは思いますが、そういうことなので気にしないでください」

「わかった。話してありがとう」

「いえ……まあ、とりあえずそういうわけなので」

わざわざ「浩太に内緒にして」なんて言う必要はないだろう。もうこれで、蓋をしてくれたはずだ。

「いつか母親からより俺からのプレゼントを期待してくれるようになるといいんだが」

「それは……そうなくても困るんですけど」

塚田がそのように思ってくれるのはありがたい。しかしそれでは塚田の負担になってしまう。

「困らないよ。母親の存在を忘れるくらい、俺の存在をでかくしてやりたい。俺がいるから母親なんていなくていいと——まあ、母親っぽいことはしてやれないが」

「求めてませんよ」

むきになっっているのが可笑しくて、つい笑ってしまった。なんだかほっとする。これまでは毎年、元妻から届くのか、それとも届かないのか……もし届かなければ何を留意するのか、なんと行って渡すのか……そんなことを暗い気持ちで考えていたから。

「少しは求めてくれ。……で、プレゼントは何にしようかな」

「だからいりませんって」

繰り返したけれど、塚田は聞いていないようだった。顎に手をあて、天井を眺める。

「いや……いくつか候補を伝えるよ。邪魔になるものや教育に悪いもの、浩太の手を煩わせるものは除外してくれ」

的確な、まるで子どもがいる人のような気遣いだった。しかしよく考えてみたら手ぶらで来るといのは塚田も気まずいかもしれない。それに浩太も玄関に立った塚田を期待の眼差しで見えてしまいそうだ。言葉でねだらないようにすることはできても、表情までコントロールさせることはまだ難しい。

「すみません……じゃあ予算は千円で。中身はお任せします」

本当は五百円でもいいと思う。しかしそれだとあまりにも選択肢を狭め過ぎてしまいそうな気がした。けれど塚田は不満げに表情を歪めた。

「……それは少し難しくないか？ ケーキも買えないぞ？」

「いいんですよ、まだ未就学児なんですから」

「だが……もう少し上げてくれ」

「だめです」

「選択肢がないじゃないか」

「そんなことないですよ」

今は、八元や塚田が子どもだった頃とは物価がまるで違っている。けれど一度でも高価なものをもってしまおうと、子どもはそれを基準に考えてしまうようになる。大きくなるにつれて要求はエスカレートするし、今後も長く付き合っていきたいからこそ引き締めておきたかった。

「……わかった」

不承不承という感じ。しかしとりあえずは領いてもらったので、ペンを取り、液晶タブレットに下書きの線を走らせた。

「浩太！ 誕生日おめでとう」

プレゼントの話をしたときはかなりふてくされ気味だった塚田は、パーティー当日、浩太に負けないぐらいのテンションで、大きな袋を提げてやってきた。

愛され方の学び方

「んうー……」

「おはよ」

「うん……」

眠い。もう少し眠りたい。

「京、お誕生日おめでとう」

「え？」

「あれ、違った？」

「うーん……」

（今日って何日だっけ？）

家の中でたくさん甘やかされながら、日付も、時間さえも気にせずただ大好きな人にお世話をしてもらっただけの毎日。お腹が空いたような気がするな、と思った頃に「ご飯だよ」と言われるし、寝坊をすれば優しく肩をトントンして起こしてもらえる。だから今の世の中のことはもう、何一つわからない。

「……そっか、そうだね。京は赤ちゃんだから誕生日なんて意識していないね」

「うん」

「かわいい。今日はね、京が生まれた一年で一番大切な日なんだよ。だからお祝いしようね」

誕生日のお祝い。人生でそんなことをしてもらったことがあつただろうか。生まれたときは誰か一人くらいは喜んでくれていたかもしれないけれど、でも、その程度の認識だった。だって深く考えれば、苦しくなるのは自分だから。

「京、愛してる。生まれてきてくれてありがとうね」

「あ……」

毎日一緒に過ごしてもらえるだけで幸せなのに、まさかそんな言葉をもたらえられるなんて。

「京、」

「うえええ……うあああえ！」

まさか誕生日を祝ってもらえるなんて思ってもみなかった。一般的にそういう日だということは知っていたけれど、そんな思い出はなかったから、だから誕生日なんてもの自体、頭から追い出していた。自分が傷つかないように。

「京……京、大好きだよ。愛してる。今日はたくさん甘えん坊しようね」

「ううう」

嬉しい。でも甘えん坊だなんて、日付に関係なく毎日している。先生はパソコンを使って仕事をしているけれど、床に座ってしてくれるから、背中や顔をこすり付けたら、足と腕の間に頭を入れてぐりぐりしたり、隣でごろごろ転がってみたり：

…そうすると先生はいつも「かわいいなあ」と言っていて、困った顔もせず体に触れてくれるから。

「ずっと抱っこしていいよか。あ、ケーキも注文してあるよ。午前うちに届くから、ご飯のあとで食べようね」

「ケーキ……」

そんなものまで。嬉しくて……それに楽しみでよだれが垂れてしまいそうだ。

「あ、かわいい顔してる。ほら」

首にかけられたよだれ拭き。口元を拭かれると、先生の唇を意識してしまう。泣いていたのに。自分はこんなに単純だったっけ、と思いながら、感情を制御することができない。

(キスしたいな……)

普段はそういうこと、ほとんど思わないのに。

じつと先生の唇を見つめていると、顔が近づいてきた。じつと見ていると、唇を塞がれる。

(わ……)

わかってくれた。それが嬉しくて、ぐつと顔を押し付けてみる。

「ッ！」

力が強すぎたのか、前歯の先端が唇に刺さるような痛みを覚えた。バツと体を離し、唇を手で押さえる。

(痛い……)

そこでハツとした。顔を上げると、同じように先生も唇を押さえていた。

「あっ、ごめ——」

「あー……やばい、かわいい……」

「え？」

先生の手をどかす。幸い唇から血は出ていない。しかし、頬が赤くなっているように見えた。

「せんせ……?」

「かわいい。まだキスの仕方知らない赤ちゃんだもんね」

「あ……」

どうやら怒ってはいないらしい。いや、怒られたことなんて一度もないけれど。

「あー……やばい。かわいすぎ」

噛み締めるような声。ぐつと腰を押し付けられ、いつもと違う硬さを感じる。オムツ越しでもわかるそれから、先生の興奮が伝わってくる。

「あーもう、ほんとどうしてそんなかわいいんだろ……」

「せんせ……」

性的なことをするのだろうか。

「大好き。かわいい。今日はいっぱいちゃいちゃしようね。あ、それともおでか

けしよいか。どこか行きたいところはある？」

(何がいいかなあ……)

もうすぐ諏訪の誕生日。

プレゼントを用意したいけれど、千尋には自分一人では買い物に行くことも、ネットで購入することもできない。レンタインのときはお店の人が協力してくれてどうにか買うことができたけれど、迷惑をかけることを思うとまた行きたいとは言いがたい。それに、確実にバレてしまう。

(うーん……どうしよう……)

どう考えても、内緒にすることは難しい。でも誕生日を祝う相手にプレゼントを買いにつれて行ってほしいと頼むのも――。

「ちーくん？」

「……え？」

「どうしたの？ お腹痛い？」

「あ、いえ。大丈夫です――」

「仕事がつらい？ いじられすぎて亀頭が痛む？」

おでこに手を当てられた。言葉では陰部の状態を尋ねながら、熱がないか確認されている。

(匠さん……)

「熱はなさそうだけど……お腹？」

今度は手がお腹に移った。くるくると優しく撫でられ、お腹がぽつと温かくなる。けれどそんなふうに心配されると心苦しくて、もう黙ってはいられなかった。

「あの、元氣だから大丈夫です。その……もうすぐ匠さんの誕生日だからプレゼントは何がいいかなって……何がいいですか？」

ここまで言ってしまったのだから、もう本人に尋ねてしまおうと思った。手間をかけたあげく、好みでないものをあげるようになるよりはずっといい。

しかし諏訪はパチパチとまばたきを繰り返すと、きよとんとした顔で言った。

「毎日もらってるよ？」

「え？」

首を傾げると、諏訪がふわりと笑った。

「俺はちーくんと一緒にいて、ちーくんのお世話をするのが一番の幸せなの。だからちーくんが笑顔で俺のところ居てくれればそれだけで幸せだから、何もいらないよ」

そう言われるだろうな……というのはなんとなく想像がついていた。でも誕生日だからちゃんと祝いたい。

(お世話してもらうのに手を洗うことが多いから、やっぱりハンドクリームかな……)

…)

諏訪は「ちーくんが痛くないように」と言っって手のケアを欠かさない。そのおかげでいつもすべすべで……けれど、ハンドクリームはバレンタインにもあげているもうそのときのものは使い終わっているけれど、また同じものをあげるといいうのもつまらない。諏訪は喜んでくれるだろうけれど。

(別のメーカーとか？ うーん……やっぱりハンドクリームじゃない方がいいかなあ……)

けれど、ハンドクリームだけでかなりの出費だろうな、と思うのだ。それでなくても生活費もすべて出してもらってしまっているし……。

(けど通帳から出して言っっても使っってくれないんだよなあ……)

これからもずっとな諏訪と一緒にいるつもりだ。もちろん諏訪が千尋に飽きたり、世話に疲れてしまわなければ、だけれど。もし諏訪も同じ気持ちでいてくれるのなら、千尋のお金は少しも使わないまま、二人で死んでしまうことになる。二人で生活しているのだし、そもそも千尋は諏訪がいなければ仕事にだっって行けないのだから、一緒に稼いだお金として分ける必要はないと思っっている。むしろ介護料を払いたいくらい。

「ね、ちーくん。何もいらなから、一緒にいてね」

そのつもりだし、そうしたいと千尋自身も思っっているけれど、誕生日くらいは特別に祝わっせてほしい。だっって大切な恋人が生まれた、大切な日なのだ。

「ね？ ちーくん」

「……じゃあ僕、もう少し静かに一人で悩みます」

拗ねたふりをして言っくと、諏訪が焦ったように千尋の肩に触れた。

「やだよ、せっつかく一緒にいるのに」

「二十四時間三百六十五日ずっとな一緒にじゃなからですか」

「まあそうだけどさ……じゃあ仕事に考っえてよ」

「仕事中っって……」

そんな余裕、あるわけがないのに。

「ふふ、ちーくんはとっつても敏感でちよっとなツンツンされただけでも気持ちよくなっつちやうから考っえ事なっなでできないかな」

「やっ……」

諏訪以外に気持ちよくなさせられている、なんて言わなからでほしい。それは事実だとお互いわかっっているけれど。

「あ、そっつか、ツンツンされなからでも恥ずかしいところを見られてるっって思っうだけで気持ちよくなっつちやうもんね」

「そんなことっ……」

「ない？ じゃあちーくんの恥ずかしいところ見せて」

「えっ」

「見られてるだけでは気持ちよくならないんですよ？」

意地悪だ。だって大好きな諏訪に見られて興奮しないわけがない。もうずっとお世話をしてもらっているけれど、少しも慣れないのだ。お風呂でもオムツ替えでも、いつでも見られる度にドキドキしている。

「あっ！」

諏訪が千尋のオムツを開き、腰の下から引き抜いた。

「ふふ、かわいい」

「やっ、だめっ」

「え？ どうして？」

「おもしろし……」

手術をしたせいとか、千尋は排尿のコントロールをすることができない。だからオムツ替えの短い時間でも不安なのだ。シーツを濡らしてしまわないか、諏訪を汚してしまわないか。

「防水シーツが入ってるから大丈夫。それよりちーくんの穴からおしっこがしよろしよろ漏れてくるところが見たいな」

「や、何言ってる……やですっ！」

本当は見られたい。それで「出ちゃってるね」と言われたい。

「オムツ、濡れてないからすぐに出ちゃうかも。でも時間がかかってもいいよ。それまでちゃんと見ていてあげるからね」

諏訪はそれつきり無言になった。千尋の足元の方に寝転がり、むき出しの陰部をじっと見つめている。

「やだあっ！ オムツしてっ」

「嫌じゃないよ。だってもう亀頭はぶっくりしてるし、おしっここの穴も濡れてきてる。尿道口、移動してよかったね。カウパーがアナルまでちゃんと濡らしてくれるよ」

「やだあっ！ 見ないでっ！」

もうつらい。亀頭をコリコリしてほしい。でもそれをしてくれないのなら見ないでほしい。こんなのただの焦らしプレイだ。

計約3万字です。よろしくお願いいいたします！

誕生日短編集2021 サンプル

gooneone (👉)わんわん)

2021/11 / 27

メール: gooneonegooneone@gmail.com    pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11    すとすと: gooneone